日 本外 科 寳 凾 第六卷 第

貮 號

原

著

附 膿胸患者ノ膿汁ニ含有セラレタル「イムペヂン」ノ立證 炎症病理學上ノ新タナル認識

第一報、雙球菌性膿ヲ以テノ檢査成績

Nachweis des Impedins im Eiter der an Pyothorax leidenden Patienten.

I. Mitteilung: Das Impedin in einem durch gewisse Diplokokken verursachten Eiter.

Von Dr. K. HIROSE,

(Aus dem Laboratorium d. Kais. chirurg. Universitätsklinik zu Kvoto. (Prof. Dr. R. Torikata))

京都帝國大學醫學部外科學研究室(鳥渴教授指導) 大學院學生 醫學士 廣 瀨

研

之

ロ、實驗第二、原濾液、三十分煮濾液及ビ百二十分煮濾液各々一・〇竓宛 注射後ノ喰菌作用 注射後ノ喰南作用 二七一(第貮號

イ、實驗第一、原濾液、三十分煮濾液及ビ百二十分煮濾液各々○・五竓宛

三、實驗方法 二、供試材料 一、緒

目

次

第六卷

原原

著

廣

襕

第六卷

t

歐文自抄

Ξ

所見總括

五、原濾液、三十分煮濾液及ビ百二十分煮濾液ノ毒力判定

鳥潟教授ガー九一七年肺炎菌、脳脊髓膜炎菌及ビ膓窒扶斯菌ノ純培養ノ生濾液ヨリモ煑濾液ノ方ガ沈澱反應ヲ却テ强大 緒

發生スル事ヲ發見シ、

「補體」等!作用ヲー樣ニ阻止スル物質ヲ發生スルコトガ立證セラレタリ。此ノ中喰菌作用ニ關シテハ大正十三年勝呂氏ガ 質』ヲ發生スルヲ認識セシ以來、今日迄數多ノ學者ニョリ人工培養基上ニ繁殖セル種々ナル細菌ガ「抗體」「喰細胞」乃至 病原微生物ハ自己ノ生存ヲ保護センガ爲ニ一種ノ物質(勢力)卽チ「イムペヂン」ナル『反應阻止

初メテ白色葡萄狀球菌ニ就キ、其ノ後石本氏ハ黃色葡萄狀球菌、今牧氏ハ結核菌、藤森氏ハ「ペスト」及ビ「コレラ」菌《山

「イムペデン」現象ヲ立證セリ。 本氏、肺炎菌、 猪口氏ハ赤痢菌、 然レドモ感染組織乃至ハ膿中ニ於テモ亦果シテ「イムペヂン」ガ立證セラル、ヤ否ヤノ檢 日高氏へ連鎖狀球菌、平田氏ハ淋菌、岡氏ハ脾脱疽菌ニ就キ夫々此等ノ人工培養ヲ以テ

索ハ從來未ダ何人モ遂行シタルモノ無シ。是レ本研究アルニ至リシ所以ナリ。

二、供

甲、可檢膿ヨリ得タル原濾液及ビ煑濾液

久保見某、女、四歲、茶商(入院昭和三年六月三日)

「主訴」 本年五月二十四日突然不機嫌、食慾不振、惡慰及ビ高熱ヲ來シ咳嗽頻發ス、爾來呼吸困難アリテ今日ニ及ブ。

甚ダ微弱ナリ。 右胸ハ 前後面共呼吸音鋭利ナリ。

六月三日 (發病後十一日目)手術 ニョリ稀薄帶黄灰白色、纖維素性物質ヲ混ゼル膿ヲ得タリ。此ノ中ニハグラム陽性雙

打診上左胸前面上部ハ輕濁シ後面ハ第三肋骨以下全濁ス、濁音域ニ於テ呼吸音

試 材 料

局部所見」 呼吸開縮右側ニ於テ著明、

球菌ヲ純培養ニ於ケルガ如ク見出セリ。

量ガ 間、 アル重湯煎中ニテ五分間加熱シタルニ可凝性生蛋白ハ塊狀ヲナシ凝固セリ。コレヲ再ビ强力遠心シ 上記 丙ヲバ同ジク百二十分間加熱シテ三十分及ビ百二十分煮濾液トセリ。此ノ二種ノ煮濾液ハ殆ンド透明ナルモ生濾液 ○・五%トナル迄五・○%石炭酸生理的食鹽水ヲ加ヘタル後、陶土濾過器ニテ濾過シ透明ナル黄金色調ヲ帶ベル 膿 ヲ三分シテ甲乙丙トシ甲ヲバ其ノ儘原濾液トナシ、 ヲ其ノ儘直チニ遠心器 ニ装ヒテ强力遠心シテ得タル上澄ヲ略々五・○竓宛小試驗管ニ分注シ攝氏百度ニ沸 乙ヲバ攝氏百度ニ沸騰シッ、アル 重湯煎中ニラ更ニ三十分 テ其 ノ上澄ニ 濾液カラ 石炭酸 **≥**⁄ ッ

乙、菌液

比スル

時

ハ極

メテ微カノ白濁ヲ帯ビタリ。

ヲ攝氏六十度ニテ三十分間加熱殺菌シ冷却後○・五%!割合ニ石炭酸ヲ加ヘタリ。 トニ回ノ後、任意量ノ生理 黄色葡萄狀球菌二十四時間培養ノ寒天斜面菌苔ヲ○・八五%生理的食鹽水ノ任意量ニ浮游セシメ食鹽水ヲ以テ洗滌ス 一的食鹽水ヲ加 ヘラ菌浮游液ヲ作リ、脱脂綿ノ薄層ヲ通過セシメラ平等ニ溷濁セル液ヲ得、是 此ノ菌液一・○竓中ニ約○・○○二八

三、實驗方法

近ノ 菌體ヲ含有セリ。

時間 敷ヲ檢シテ同時ニ塗抹標本ヲ作リ置キ、甲ニハ原濾液、乙ニハ三十分煮濾液、丙ニハ百二十分煮濾液ヲ各々○・五竓宛腹 腔内ニ注射シ三十分經過後頸靜脈ヨリ黃色葡萄狀球菌液一・○竓ヲ血行内へ注入シ、其ノ後十五分、三十分、 ギームザ氏液ニテ染色檢鏡シ喰細胞二百個ヲ計上シ「其ノ種類ノ百分率」「現ニ菌體ヲ包喰セル喰細胞數」「被喰菌數」及ど 實驗第 四時間、八時間 = テハ 體重三百瓦前後 ノ六回ニ亘リテ後肢皮下靜脈ョリ採血シテ血液一立方粍内ノ白血球數ヲ檢シ、他方塗抹標本ヲ製シ ノ各群三頭 ョリ成ル海猽ニ、先ヅ後肢皮下靜脈ョリ採血シテ正常血液一立方粍内白血 一時間、二

實驗第二ニテ 第六卷 ハ三群ノ海狐 「原 著 廣 ニ原及ビ煑濾液夫々一・○蚝宛腹腔内ニ注射シ、其ノ他ハ實驗第一ノ場合ト同一條件ノ下ニ (第武號 三

「喰菌子數」ヲ算出比較シタ

ッ

瀬

喰菌作用ヲ檢査比較セリ。

イ、實驗第一、原濾液、三十分養濾液及ビ百二十分養濾液各々〇・五竓宛注射 後ノ喰菌作用

所見ハ第一乃至第三表及ビ第一乃至第四圖ニ示スガ如シ。

艇

一大

原噶液0.5近注射後 / 噴菌作用(三頭分平均)

0	田後一・	經過後萬	一十年	後注射 <	生態。				
		珠眶			五分五十	注射的工			
#KK0	七九八〇	4040	く 430	< ₭110	40110	4代<0	方表	立 一 山 西 西	血液素
0.55	EO.!	اداخ	1.1	1111	41.1	0.1	7	卓滅	を数率
4.0	10.0	10.7	10.3	7.0	5.7	0			
14.0	36.0	43.0	35.6	19.4	16.4	0		<u></u>	
18.0	46.0	53.7	45.9	26.4	22.1	0		4	
长星,人	£<.0	11,04	エカンコ	四大川	三人二	川田、大	%	#	中
4.0	10.0	10.7	9.ຍ	6.2	4.7	0	贤	座 多型	
14.0	36.0	43.0	32.0	17:7	12.7	0	퐏	核	声
儿子,	川长、周	r Jeh	用, [川	(I, NE	単次、三	いけ	%	薬	禁
°	0	0	0	0	0	0	舜	Œ	
0	0	0	0	0	0	0	漢	梨	ţı
 	4.11	11.11	6.E	用~加	11.0	(M_{I	%	大單	검
0	0	0	0.3	0	0	0	舜	大單核及移行型	
0	0	0	٠. دی	0	0	0	퐏	行型	個
0.	H\(I	H, Ju	0,E	H, Ju	[II],[I	(L)	%	温に	빠
0	0	0	0.7	0.7	1.0	0	最	エオジ	-+
0	0	0	2.3	1.7	3.7	0	垂	٧,	⊣
N.O	W.O	D.\$		M,0	(1.0	H .0	%	門	
٥,	0	0	0	0	0	0	爲		
٥	0	0	0	0	0	0	巫	严	

總	五二三〇〇二二五二三〇〇	47.7	164.4	212.1	量に	45.0 155.4
	<u> </u>					200.4

第二表 三十分煮濾液0.5竓注射後ノ喰菌作用(三頭分平均)

	血耗	敗率				白	h.	11.	球		=	स		個	# p	1	Ŀ			
	液内一白	を		н.		中个	生多型	核	淋	巴	球	大單	核及移	行型	嗜L:	エオジ	ン「	肥		胙
	立血。方球	战 比	喰	闹	+	%	喰	南	%	喰	南	%	喰	南	%	喰	幫	%	喰	粛
	· C	1,0	0	0	0	M1.0	0	0	六四、五	0	0	E (1)	0	0	3	0	0	0.71	0	0
十五分			9.6	31.3	40.9	四 一 五	9.3	28.3	超二	0	0	11.0	0	θ	11.0	0.3	3.0	回,0	0	0
三十分			10.7	34 .3	45.0	五、五	8.7	28.3	11,01	0	0	四、人	0.7	1.3	=, ±	1.3	4.7	0,1	0	0
一時間	长10	=	14.3	52.7	67.0	五四五	13.7	51.0	0.0	0	0	E,	0.3	1.0	五.	0.3	0.7	£,0	0	()
二時間	公司八 0	17回	18.3	60.0	78.3	五五二	18.0	59.0	八六	0	0	五、三	0.3	1.0	11.0	0	0	0,7	0	()
四時間	七九六〇		14.3	49.0	63.3	八九、七	14.0	49.0	11年	0	0	* ` 0	0	0	O, 六	0	0	·⊃_	0	0
八時間		0元	8.6	32.4	41.0	无 、八	8.3	31.7	至 五	0	0	3£ 3£	0.3	0.7	0,11	0	0	0_	0	0
	四三八四〇	六 20	75.8	259.7	335.5	莹二、三	72.0	247.3		喰剤	率=7.6	6								
	十五分 三十分 一時間 二時間 四時間 八時間	十五分三十分一時間 二時間 四時間 八時間 内白血球 犬(x0 大(x0)))))))	十五分三十分 中間 二時間 四時間 八時間	中五分三十分 中間 14.3	株式 株式 株式 株式 株式 株式 株式 株式	液内 中面域比 中面域 中面域	中 中	液内ト 中性多型 次 中性多型 次 中性多型 次 中性多型 次 中性多型 次 中性多型 次 日本 大 日本 大 日本 大 日本 大 日本 日本	液内トゥー 中性多型核 中性多型核 水 中域 中域 中域 中域 中域 中域 中域	液内ト 中性多型核	液内トーロ 中性多型核 淋 巴 大名の で 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本	液内ト 中性多型核 淋 巴 球	液内トーロル 中性多型核 淋 巴 球 大型 大型 中性多型核 淋 巴 球 大型 水 中性多型核 淋 巴 球 大型 水 中性多型核 淋 巴 球 大型 水 中性 水 小 中性 水 水 中性 水 水 中性 水 小 中世 水 小 中世 水 小 中世 水 小 日本 小 小 小 小 小 小 小 小 小	液内ト 中性多型核 淋 巴 球 大單核及移 大單核及移 水 中性多型核 淋 巴 球 大單核及移 水 喰 南 ※ 喰 南 ※ 喰 南 ※ 喰 南 ※ 喰 南 ※ 喰 南 ※ 喰 南 ※ 喰 南 ※ 喰 南 ※ 喰 南 ※ 喰 南 ※ 喰 南 ※ 喰 南 ※ 喰 南 ※ 电 和 ※ 电 和 和 和 和 和 和 和 和 和	液内ト 中性多型核 淋 巴 球 大單核及移行型 水 山 南 水 山 南 水 山 南 水 山 南 水 山 南 水 山 南 水 山 南 水 山 南 水 山 南 水 山 南 水 山 南 水 山 南 水 山 南 和 和 和 和 和 和 和 和 和	液内ト 中性多型核 淋 巴 球 大單核及移行型 嘴上 水 中性多型核 淋 巴 球 大單核及移行型 嘴上 水 中性多型核	液内ト 中性多型核 淋 巴 球 大單核及移行型 嘴Lエオジ 一 内	液内ト 中性多型核 淋 巴 球 大單核及移行型 嘴Lエオジン 一 自動 方球比 中性多型核 淋 巴 球 大單核及移行型 嘴Lエオジン 一 自動 方球比 の の の 三 の の の 高温 の の の 三 の の 一 の の の 向 向 向 の 回 点 の の 回 点 の の 回 点 の の の 回 点 の の の 回 点 の の の 回 点 の の 回 点 の の の 回 点 の の 回 点 の の 回 点 の の 回 点 の の 回 点 の の の 回 点 の の の 回 点 の の 回 点 の の 回 点 の の 回 点 の の 回 点 の の 回 点 の の 回 点 の の 回 点 の の 回 点 の の 回 点 の の 回 点 の の 回 点 の の 回 点 の の の 回 点 の の 回 点 の の の 回 点 の の の 回 点 の の 回 点 の の の 回 点 の の の 回 点 の の の 回 点 の の の 回 点 の の の 回 点 の の の の	一次内操 一次 中性多型核 淋 巴 球 大單核及移行型 端にエオジン 肥 一次 中性多型核 淋 巴 球 大單核及移行型 端にエオジン 肥 が成 内 が 中性多型核 対 対 が か 中性多型核 対 が か 中性多型核 対 対 が か 中性多型核 対 が か 中性多型核 対 が か 中性多型核 対 が か 中性多型核 対 が か か か か か か か か か	液内ト

第三表 百二十分煮濾液0.5延注射後ノ喰菌作用(三頭分平均)

		血精液	毛敷率				白		Mi.	球		=	百		個		†	上			
		立即	毛數率 内增 11減	喰	南	子	中	性多型	型核	淋	巴	球	大單	核及移	行型	嗜し	エオジ	ン「	肥		胖
_	S-45	方理	秋比				%	喰	菌	%	喰	南	%	喰	潮	%	喰	菌	%	喰	菌
	注射前	OLERA	1,0	0	0	0	4,41	0	0	共八	0	0	三、宝	0	0	7.	0	0	0.11	0	0
百謀	十五分	<u> </u>	<u></u>	6.6	15.7	22.3	三、三	6.3	15.0		0	0	£, 1	0	0	= = = = = = = = = = = = = = = = = = = =	0.3	0.7	1 0 11	0	0
百二十分煮濾液注射三十分經過後、南一・〇竓注入	分三十分一時間二時間	음	t0,1	9.0	23.0	32.0	第0,0	9.0	23.0		0	0	m.0	0	0	1,1	0	0	0	0	0
減液注入	一時間	슬=0	=	11.3	44.7	56.0	空、人	11.0	44.0		0	0	一九	0.3	0.7	- T	0	0	F.0	0	0
射三十	二時間	丸000	011,1	15.3	56.7	72.0	七四八八	15.3	56.7		0	0	B. 0	0	0	1,3	0	0	0,11	0	0
分經過	四時間	<u>수</u>	1/10	6.3	24.0	30.3	益二	6.3	24.0		0	0	= = =	0	0	×.0	0	0	071	0	0
	時間	大七六〇	0、九0	7.6	22.6	30.2	太四、五	7.3	21.3	100	0	0	四、七	0	0	0,3	0	0	0,1	0	0
料和		四八四八0	ベロス	56.1	186.7	242.8	三宝三、六	55.2	184.0		企 京3	≦=5.00			/	_=_'			포	1	
								239	9.2		. Took Erral	, 0.00									

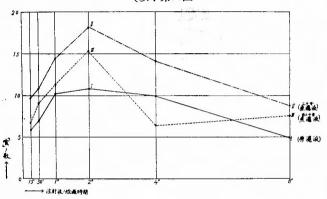
所見機括

(一)喰菌作用最モ旺盛ナルハ中性多型核白血球ニシテ嗜「エオジン」細胞之ニ次ず、大單核細胞及ど移行型ニテハ作用最 モ弱ク、淋巴球及ビ肥胖細胞ニテハ菌體ラ包喰セルラ認メザリキ。

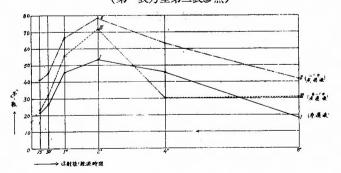
第一 圖 各注射材料 ト 喰細胞數「喰」トノ關係 (第一表乃至第三表参照)

| 原濾液 | 0.5竓加菌液1.0竓 | 1.5・・・・ 三十分煮濾液 | 0.5・・・・ | 三十分煮濾液 | 0.5・・・・ | 五二十分煮濾液 | 0.5・・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・・ | 1.0・ | 1.0・・ | 1.0・ | 1.0・・ | 1.0・ | 1.0・ | 1.0・ | 1.0・ | 1.0・ | 1.0・ | 1.0・ |

(以下第四圖迄之=準ズ)

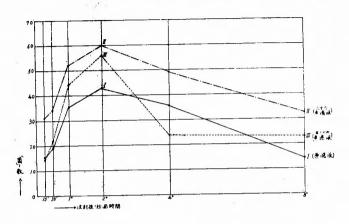


第三 圖 各注射材料ト喰菌子敷「子」トノ關係 (第一表乃至第三表參照)

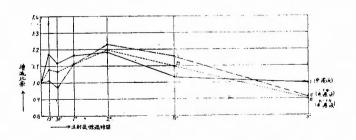


[底 撇] 廣瀬 跳六卷

第二圖 各注射材料ト被喰菌敷「菌」トノ関係 · (第一表乃至第三表參照)



第四 圖 各注射材料ニョル血液單位容積内白血 球数ノ推移(増减比率ニテ示ス) (第一表乃至第三表参照)



シ

(二)現ニ菌體ヲ包喰セ ル喰細胞敷「喰」ニ就キラ觀ルニ何レノ注射材料ノ場合モ菌液注入後十五分目ョリ次第ニ増加 二七八

場合七五・八、百二十分煮濾液注射ノ場合五六・一ニシテ、三十分煮濾液注射動物ハ他ノ二濾液注射動物ヲ遙カニ凌駕シ、 大、百二十分養濾液ノ場合之ニ次ギ、原濾液ノ場合最小ナリキ。總和ハ原濾液注射ノ場合四七・七、三十分養濾液注射ノ 著明ニシテ其他ノ濾液ニ比シ最小トナリ八時間目ニ稍々增加セリ。四時間目以外ノ檢血時ニ於テハ三十分煮濾液ノ場合最 二時間目最大數ニ達シ其ノ後次第ニ滅少スル傾向ヲ示セリ。唯百二十分煑濾液ハ二時間目ョリ四時間目迄ノ減少程度特ニ

ト略々同一關係ヲ有シ、其ノ總和ハ三十分養濾液注射ノ場合最大ニシテ二五九・七、百二十分養濾液注射ノ場合中位ニシ 原濾液注動物最小ナリキ。 (三)現ニ喰細胞ヨリ包喰セラレ居ル被喰菌敷「菌」ニ就キテ觀ルニ、其ノ推移ハ何レノ注射液ノ場合ニテモ 喰細胞數「喰」

ラー八六・七、原濾液注射ノ場合最小ニシテー六四・四ナリキ。 |四||喰」ト||菌」トノ和ナル喰菌子敷「子」ノ各檢査時ニ於ケル關係ハ喰細胞數「喰」及ビ被喰崩敷「崩」ノ場合ト殆

ンド同

射ノ場合二四二・八ニシテ、三十分養濾液注射ニテハ嶄然他ヲ拔キ首位ヲ占メ、百二十分養濾液注射ノ場合之ニ次ギ、原 濾液注射ノ場合最下位ナリキ。 一ナル關係ヲ有シ、且ッソノ總和ハ原濾液注射ノ場合二一二・一、三十分煮濾液注射ノ場合三三五・五、 百二十分煮滤液注

加シ二時間目ニ最高ニ達セリ、二時間目以後ハ三種ノ濾液ノ場合共ニ漸次ニ减少シ八時間目ニハ凡テ 注射前 間目最大數ニ達シ、三十分養濾液注射ノ場合ハ十五分目僅カニ增加セシモ三十分目ニ注射前ヨリ滅少シ、其ノ後次第ニ增 (五)血液一立方粍内廣義喰細胞數「總喰」ノ推移ハ原濾液及ビ百二十分煮濾液ノ場合ハ菌液注入後次第ニ増加シテ二時 ヨリモ

原濾液ノ場合最大、三十分及ビ百二十分養濾液ノ場合ハ何レモ是レヨリ遙カニ小ニシテ、三十分養濾液ノ場合ハ僅 菌液注射後 ノ喰細胞數總和ハ原濾液注射ノ場合最大、三十分煮濾液注射ノ場合最小「シテ、且ツ其ノ增减比率總和 カノ 差

乜

y o

テ、百二十分煮濾液是レニ次ギ、三十分煮濾液ニテハ最大數ナリキ。 總和ハ原煑何レノ濾液ニテモ大差ナキニ拘ハラズ「喰」「菌」及ビ「子」ハ凡テ原濾液ニテハ非常ニ大ナル差ヲ以テ最小ニシ (六)喰菌作用ニ於テ主役ヲ演ズル中性多型核白血球ノミヲ觀察スルニ、何レノ場合モ其ノ%數ハ著明ニ増加シ且ツ其ノ

ロ、實驗第二、原濾液、三十分煑濾液及ビ百二十分煑濾液各々一・〇竓宛 注射後ノ喰菌作用

新日州 「臺灣港1.0元注射後1、最高作用(三風分平地) 所見へ第四表乃至第六表及ビ第五圖乃至第八圖ニ示スガ如シ。

後崩後	分經過		郷液注: ・O 発注			ĺ		
四時間	一年記	1	1	 	注射館 -	1		
4 4%0	<<00	0lı>4	长 4110	011114	K숙회 0	方球	一一中山山	血液統統內
[[4]]	1.15		10.1	1.0%	0.1	7	英雄	少数
8.6	9.3	9.0	6.0	8.3	0		舜	
30.3	35.7	29.3	19.7	21.0	0		趣	
38.9	45.0	38.3	25.7	29.3	0		4	
六人、五	力リ、国	KE, III	に、用豆	田屋田	0.00	%	#	卧
တ .သ	9.3	8.7	6.0	8.3	0	舜	1 多 型	
29.0	35.7	28.3	19.7	21.0	٥	퐖‡	核	4
114、1	0.#II	[12[1]4	φ.[#	Hilth	用しい	%	≱	禁
0	0	0	0	0	0	憂	[=	
0	0	•	0	0	0	Æ	急	11
ווֶנֵי	[1] []	0.14	0.11	ا د<	1 - [0]	%	大單	田
0.3	0	0.3	0	0	0	舜	大單核及移行型	
1.3	0	1.0	0	0	0	摇	行型	童
	1.0	W.O	0.K	0.1	4.1	%	番	nii.
0	0	0	0	0	0	肾	# #	7
0	0	0	0	0	0	避	ζ,	+
.0		0را	₩.O	11.0	0	%	픮	
0	0	0	0	0	0	舜		
0	0	0	. 0	0	0	*	罪	

第六卷

原原

蓍

廣瀬

二七九

(第武號

九

第六卷	[8	ら 押]	聚凝			1140	(策成號	10)
八時間 總 和	一つ世 七、〇四	48.9	16.7 24.4 152.7 201.6	造 7.7 16.7	五	0 0	0 0	0 0

第五表 三十分煮濾液1.0延注射後ノ喰菌作用(三頭分平均)

		血粍數	率				白	,rt	il.	採		=	百		個	<u> </u>	-	上			
		液内ト			-н-	_	中(生多型	核	淋		球	大單	核及移行	厅型	嗜二	エオ ジ	ソコ	肥		胖
		立血減 方球比		喰	南	子	%	喰	蔚	%	喰	南	%	喰	崩	%	喰	南	%	喰	菌
注射前		五八四 0	-	0	0	0	元	o	0	五くと西	0	0	n n	0	0	11.0	0	0	£ 0	0	0
=-	十五分	天 20		9.6	27.3	36.9	四二	8.3	24.0	州型 (0	0	0	<u> </u>	0	0	t, 1	1.3	3.3	- J	0	0
三十八郎とは大三十四郎と前を一・〇郎注入	五分三十分	查 元		10.0	33.0	43.0	四八二	9.7	31.3	四 五 五	0	0	7	0.3	1.7	≡ ′0	: 0	0	五,	0	(
	一時間	六四六〇	;	12.6	47.3	59.6	兲"0	12.0	45.3	三八、八	0	0	4.1	0.3	1.0	t, 1	0.3	1.0	0.7	0	
	二時間	七五八〇		16.0	64.7	80.7	至至	16.0	64.7	#17.11	0	0	= 0	0	0	0.7	0	0	O,	0	(
	四時間		-	15.0	50.7	65.7	产工	14.3	49.0	三三	0	0	= = = = = = = = = = = = = = = = = = = =	0.7	1.7	4.0	0	0	11.0	0	0
٤	八時間		- 1	9.3	28.0	37.3	老、七	9.0	27.0	三之、五	0	0	E	0.3	1.0	07	0	0	0,1	o	C

總 元九八O 72.5 251.0 323.5 景 69.3 241.3 和 310.6

喰菌率=8.09

第六表 百二十分煮濾液1.0距注射後ノ喰菌作用(三頭分平均)

		血耗	數率				白		ÍI.	េ球		=	百		個	ä	t	上			
		血液一立方	增減	喰	菌	子	中作	生多型	核	淋	巴	뇄	大單	核及移	行型	嗜_	ヱォジ	ソコ	肥		胖
		方球	比		P.4		%	喰	蔛	%	喰	南	%	喰	鬫	%	喰	樹	%	喰	幫
身育		岩台	0.0	0	0	0	兲、五	0	0	五,11	0	0	170	0	0		0	0	0.7	0	0
百液	十五分	01tmk	分	7.3	18.7	26.0	图图 0	6.3	16.0		0	0	7,7	0	0	17.0	1.0	2.7		0	0
百二十分煮濾液注射三十分經過後南液一・〇竓注入	三十分	0%44		9.3	29.7	39.0	五	9.0	28.7		0	0	1170	0	0	11.0	0.3	1.0		0	0
濾液注	時間	大路()	-, -,	9.3	31.4	40.7	五五、五	9.0	30.7	三九、	0	0		0	0	= =	0.3	0.7		0	()
射三十二	二時間	公司(20	三	13.0	40.7	53.7	二、五	13.7	40.7	三	0	0	11.0	0	0	H,0	0	0	2.0	0	0
分經過後	四時間	七九00	一,一4	10.3	33.3	43.6	党 、三	10.3	33.3		0	0	11.11	0	0	4,1	0	0	E,0	0	0
南	八時間	六九八 〇	1,04	5.7	17.3	23.0	五三、五五	5.7	17.3		0	0	= '\\	0	0	07.0	0	0		0	0
科	-	2000年度	六、全	54.9	171.1	226.0	量大、主	53.3	166.7		喰剤	率=4.9									
								22	0.0												

鉄

各注射材料下喰細胞數「喰」下一關係 第四表乃至第六表參照

原應液 1.0%加菌液1.0%) 三十分煮滤液 1.0%加菌液1.0%)注射ノ場合 百二十分煮滤液 1.0%加菌液1.0%)

絍

汁

©0

各注射材料下被喧闹数「南」下了關係

(第四表乃至第六表参照)

(以下第八圖汽之=準ズ)

65 - 74

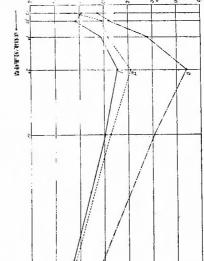
絍

继

ተ

各注射材料下喰属于敷厂于JF/關係 (第四表乃至第六表参照)

江州大湖西 一個 et.



テ

嗜 エオジン」

多型核白血球ニ 第一ト同ジク中性 モ旺盛ナルハ實験

× 塱 各注射材料=ヨル血液單位容積内自 血球敷ノ推移(増减比率ニテ示ス)

(第四表乃至第六表参照)

上明任 九 面時期

一年前在祖马时間

キ。

乜

jν

ヲ認メ得ザリ

巳球及ビ肥胖細胞 型ハ最モ弱ク、淋 單核細胞及ビ移行 細胞之ニ亞ギ、

ニテハ菌體ヲ包喰

(二)現ニ細菌體

射ノ場合ハ三十分 數「喰」、原濾液注 ヲ包喰セル喰細胞

减ジ二時間目最大

目ハ十五分目ヨリ

<u>ー</u> 三

二八二

(第) 別

所見概括

(一)喰菌作用最

場合四八・九、三十分養濾液ノ場合七二・五、百二十分養濾液ノ場合五四・九ニシテ三十分養濾液ノ場合遙カニ他ニ 敷トナリ、三十分及ビ百二十分煑濾液注射ノ場合ハ十五分目ョリ漸次増加シテ二時間目最大敷トナレリ。總和 ハ原源 一優リ、

百二十分煮濾液ノ場合是レニ次ギ、原濾液ニテハ最小ナリキ。

五一・○、百二十分養濾液中位ヲ占メラー七一・一、原濾液ノ場合一五二・七ニラ最小ナリキ。 (三)被喰菌數「菌」ノ推移ハ三者共ニ喰細胞數「喰」ノ推移ト全ク竝行シ、ソノ總和ハ三十分養濾液ノ場合最大ニシテニ

地、○ ラ拔キテ最大ナリキ。 ○一•六、百二十分養濾液ノ場合コレヨリ稍々大ニシテ二二六•○、然ルニ三十分養濾液ニテハ三二三・五ニシテ巍然一頭(四)喰菌子數「子」ノ推移ハ「喰」及ビ「菌」ニ於テ現ハレタル所見ト竝行シ、其ノ總和ノ最小ナルハ原濾液ノ場合ニシテニ

時間目迄漸次增加シテ二時間目最大數ニ達シ、二時間目以後ハ三十分及ど百二十分養濾液共ニ次第ニ减少シ八時間目ニハ 液ハ注射後十五分目ニ於テ注射前ヨリ僅カニ滅少シ其後增加シテ二時間目最大數ニ達シ、百二十分養濾液ハ菌液注入後二 後次第二增加 (五)更ニ血液一立方粍内ノ廣義喰細胞數「總喰」ノ推移ハ原濾液ノ場合ハ注射後三十分目ハ十五分目ヨリ减少セ シ四 |時間目最大數ニ達シ、是レヨリ漸次减少セシモ八時間目ハ尙ホ注射前ニ比シ甚ダ大ナリキ。三十分煑濾 シモ 其

注射前ト殆ンド大差ナキニ至レリ。ソノ總和及ビ增滅比率總和ハ三十分養濾液注射ノ場合最小、原濾液ノ場合最大ニシテ 百二十分養濾液、僅少ノ差ヲ以テ三十分養濾液最小ナリキ、然ルニ原濾液注射ノ場合ハ却ラ喰菌子數最小、百二十分養濾 百二十分養濾液ハ其ノ中間ニ位セリ。 (六)中性多型核白血球ヲ觀察スルニ 菌液注入後其1%數總和ハ大ナル差ヲ以テ原濾液1場合最大ニ シ テ、三十分及ビ

液ノ場合之レョリ大、三十分煮濾液ノ場合最大ナリキ。 ·七)第五乃至第七圖ヲ通ジテ明白ニ立證セラレタル所見ハ、原濾液ニテハ菌液注入後三十分目ニ陰性期 (negativePhase)

顯著ナレドモ、三十分及ビ百二十分養濾液ニテハ全然之レヲ見ザルノ點ナリトス。

第六卷

原原

(第武號 _ =

ð

四 所 見 總

括

實驗第一及ビ第二ノ成績ヲ總括シテ第七表ヲ得、 示シテ第九圖及ビ第十圖ヲ得タリ。

之レ實驗

_

ヲ

圖

總括ニシテ是ニ據リテ次ノ諸項ヲ認識シ得ベシ。

各注射材料 ニョル 喰南作用總括

表

第

t

第十圖 各種抗原液注射量 ト 喰 南率 トノ關係(第七表參照)

ノ總和ナリ。

血球總數ト

六回檢査ニテ得タル血中一立方粍内白血球數

査ニ於ケル總和ナリ。 査ニ於ケル總和ナリ。

煮百

減二

液分

3

54.9

171.1

226.0

六<u>里</u> 三<u>六</u>

4.99

第六表

煮三

濾十

液分

72.5

251.0

323.5

元元(20

第

Ŧi.

表

8.09

原

濾

液

48.9

152.7

201.6

七、2000

4.40

24

表

煮百

減二

液分

£,0

56.1

186.7

242.8

八四八日

5.00

第三表

煮三

濾十

液分

¥.0

75.8

259.7

335.5

大学の日本人間の

7.66

第二

表

原

瀌

液

Œ,0

47.7

164.4

212.1

4.13

郭

表

注射

材料

(注射量

喰

菌

子

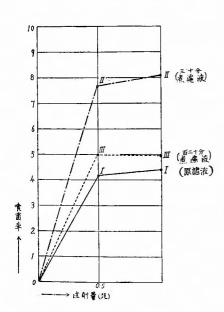
数白 ト血

比球率總

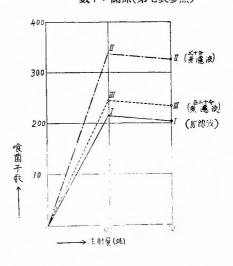
喰菌率

原

表



第 九 圖 各種抗原液注射量 卜喰菌子 數トノ關係(第七表参照)



四

(第武號

二八四

ニ逆行シテ喰菌子敷ハ减少セ ッ。

(二)何 v 立方粍內廣義喰細胞數 进 射 材料 ノ場 合 ニテモ、 「總喰」ノ總和 注射量ヲ○・五竓ョリ一・○竓ニ增量セル い何レ ノ注射材料ノ場合ニテモ○・五竓ノ時ョリモ一・○竓 プラ時 ハ略

同 程度二 减 1 七 シ ガ、 ソ ノ増減 比率總和 ٧٠ 注 射量ト 連行 シ テ増大 也 ッ

(三)喰 南率 ۱ر 原濾液及ビ三十分煮濾液注射ノ場合ハ注射量ニ連行シテ増大セシガ、百二十分煮濾液ニテハ〇・五及ビー・ リキ。 然シテ三十分養濾液注射ノ場合 其ノ増大數原濾液注射ノ場合ヨ y æ 大ナリキ

) 蚝 注 射時 m 液 共ニ殆ンド 立方粍 內廣義 移動 ナカ 喰細胞數 「總喰」ノ總和 ハ注射量ガ○・五 竓 ニテモ 一・〇竓ニテモ原濾液注射 ノ場合ハ 養爐

y 277

射

ノ場

合

3

y

æ

大ナ

リキ、

I.

ツ増减比率總和

Æ

原濾液

ノ場合最大ナリキ、即チ原濾液注射ノ場合ハ喰細胞

敷ノ出

リンハン量

☆ニ三十分養濾液へ他ノ何レョリ(五)喰菌子數「子」及ビ喰菌率ハッキ。養濾液ニテハ何レノ注射量

五 原濾液、 三十分煑瀘液及ビ百二十分煑瀘液 ノ毒カ判定

注 射 原·貧兩 液 ٠ ١ 濾液 定範圍 注 射後 内に於テハ毒力小ナルモノヨ ノ血 液單位容積内白血球數ノ增减ハ洼射液ノ毒力ト密接ナル り白血球過多ヲ惹起スルコト强大ニシテ、若シ毒力過大ニ 關係 ヲ有 ス jν Æ ノ = **シ** 失ス テ 毒力大ナル N 時 ハ却テ

前二實驗ニ 於 ケ w Ú 液單 位 容積內廣義喰細胞數「總喰」、原・養兩濾液 ノ毒力ヲ標徴シルモノナレ ۴ Æ 原。煮 ラレ 兩濾 ズ、眞 液

=

比

腹

白血

球

過

小

ヲ來

ス

Æ

1

ナ

り。

毒力 遙 カニ 准 剕 大ナ 定 射 シ رر テ、 ナ iv 毒力 ソノ 難 + 7 後 事 有 = ١٠_ ス 於 ・旣 w ケル 菌 = 諸學者 液 血液一 ノ 一 定量 = 立方粍 3 リ度 ヲ 注 內白 タ論 入 ス 述 N M 時 球 七 數 ラレ 1 濾液 增 シ所ナリ。 减 ノミ ヺ 精査シ = 故ニ余 曲 毒力 N 毒力ノ相違ガ最早充分ニ プ强弱 ハ原・養兩濾液ヲ取リテ夫レ 1 判 定二 資シ A リ。 表現 1 3 ヲ海

兌 第六卷 ハ第八表、 原原 第十 著 圖 及 廣 ビ第十二圖 = 掲ゲラ V Þ り。 但 シ = ハ 各群海狼三頭宛ノ平均 二八五 價ナ

所

(第武號 五

y °

٨ 表 注射前後ニ於ケル血液一立方粍内白血球敷ノ推移原遮液、三十分煮濾液及ビ百二十分煮濾液ノ海猽腹腔内 (各三頭分平均)

第

 三七	_ .≡	1, 20	1 1 1	- EK	I III U	1 0		il
公司	九四00	101110	会	条0	公00	25 25 25	1,0	煮百二十 次 次 一 次
大型:10 で記:10	1、六0	1.2% 000 000	1250	一天 三天 二天 二天 二天 二	〇四四四八九五 五二〇	- 700 - 700 - 700	-	煮三 濾十 液分
- \ - \ - \ - \ - \ - \ - \ - \ - \ - \	一、七四 一、七四	一些公	117.1 0114#	0.25	0、元0		<u></u>	原滤液
でいる	一次言	一九七四〇	八000	一、 <u>景</u>	☆ 型型∩) 「(四)	_ <u>~</u> 공승	0	煮百二十分
1.15 004 400	1750	一八四0	国间,1	大豆00 1、1 1、1	一 <u>菜</u>	五四八0	0.4	煮三 濾十 液分
一、11三	一个八八〇	一生10	一、七七 九八二〇	一、四个	一八五四〇	五五四0	五,0	原心液
八時間	時間	二時間	時間	三十分	十五分	注射前	炬	1
	摔	增減比	y ,	球敷ト	白血		注射量	- 生 計 オ

総十川國

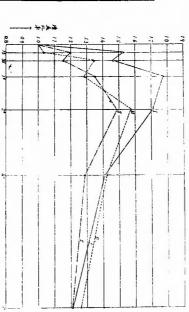
生・煮雨心液10%注射= ヨ ル血液單位容積内白血球1動檻(増減比率ヲ以テ示ス)(第八表参照)

→ 法財徒 经通券的

合い何レノ注射液ニテモ 射後三十分目八十五分目 强大ニシテ, 百二十分煮濾液八初 ヲ以テセ 今血液單位容積內白血球數ノ推移ヲ 觀察スルニ ○・五竓注射ノ N 3 養濾液ノ中ニテハ百二十分養濾液ノ方ガ三十分養濾液 y **モ稍々大ナリキ。原濾液及ビ三十分煮濾液ニテハ注** メョリ漸次増加シ二時間目ニ最大トナレリ。 白血球過多ヲ惹起シ其ノ程度ハ原濾液最 3 ŋ モ少シク減少シ二時間目最大ニシテ、 場 Æ

考え北京

一、注解統一独立公司



二八六 (第武號 さ

生・煮雨減液0.5近注射= ヨ ル血液單位容積内白血球敷ノ動格(増減比率ヲ以テ示ス)(第八妻参照)

第十一圈

三十分煮濾液 其 ·〇竓注射 ノ度微弱 ニテハ十五分目白血 ナ ノ場合ハ原濾液 'n シニ 二時 間 ニテハ注射後三十分目迄白血球過少ヲ來シ、 目 球過少ヲ來 = 急激 = 甚大ナル セシ モ三十分目ョリ白血 白血 球 過多 = 移行シ其 |球過多ヲ來シ、百二十分養濾液ニテ 1 後八 時間目ニ至リテ漸ク白血球過多ヲ惹 時間 目迄ソノ程度他 比シ最大ナリ ハ十五分目 起 セ キ。 IJ **≥**⁄

上、球 所見 多 見、三十分及ど百二十分養濾液ニショ來シ其ノ程度三十分養濾液ニ於 比シテ原濾 (液)方が毒いたります。 力、 甚が タ强大ナル ルヲ明示セ ルモノナリ。

六、 考

察

ラヽノ・十 最 かります。 小ナ 全質 'n 銢 ルンソ・ 、 陰燼作用いい (温液ノ毒力ハ原 ヲ通覧 キ 然 Æ ス ルニ膿胸 此 リトテト 顯、著 1 際 三、惹、液 Í 大・セ・ナ・ラ・ル・シ 患者 液單 一位容積 ノグラム陽性 雙球 菌 性膿 ヨリ作ラレタル 原濾液 ٧٠ 喰菌子數及ビ 喰菌率共ニ 煮濾液ニ比 **>**

全ク非働 進 ズ シ Ŀ 記實驗結果 菌 性ト 體 N = ヲ構 此 ナルモ 成 ノ「溶解性菌物質」中 = 對 ノナ 居 ス N w 物 リト 唯 質 <u>_</u>フ 理解 解 菌 體 スル 案 = 1 膿 ニアリ。(註)「溶解性菌物質」トハ生菌ガ産生シタル水溶性物質トノ ۱ف 喰菌作用ヲ阻止 中 = ハ 溶解 性菌物質 ス ル物質 質」存 Æ シ此ノ 亦混在 Æ シ、此 ノハ耐 ルノ物質 養沸 ۸, 性强大ニシ 攝氏百度三十分ノ テ而シテ喰菌作 意味 煮沸 苚 シ 3 テ ヲ催 ŋ 必 テ

チ 膿 3 y ノ原濾液中 = ハ 阻 止 物質ノ存在 去 リテ水中 スルアリテ喰菌作用ガー定度阻止 溶解 タル 物 質ノミヲ意味 七 ス ラレ居タルモ jν 次第二 非ザ ルモ 1 /ナリ°)

シ

7

≥⁄

ガ

7

Æ 强 止 天 作 甪 ナ w 消 喰 滅 菌 ス 作 w ガ 用ヲ發揮 故 出 七 發材料 w ŧ 1 タル ナ y 原濾液中二含有セラル **=** レ實ニ鳥潟教授ニ 、喰粛作用催進物質ハ自己ノ全能力ヲ發揮シテ原濾液 3 リテ初 メテ樹立セラレ タル「イムペデ ナル ガ **煮濾液** ر ا 學說 テ 他 رر 其

「原 著

黀

瀨

第六卷

ザ

w

ナ

(第武號 تا-

二八八

セ 用 3 w y = 對シ _ t シ テ人工 IV 第六卷 **煮滤** 原滤 阻 止. 液 液 的 培養基上 人養濾液 ハ却テコレ = 作 崩 ノ比較二於テ、原濾液ハ喰菌作用 ス w 菌 ヲ J 3 促進 ŋ ŀ 作レ ٧١ 旣二 セ ルヲ立 N 原濾液中ノ阻止物質ハ菌 多クノ 證セ / 學者ニ リ、即 3 チ リテ立 グラム陽性雙球菌性膿胸膿中ニ ノ指標ト 證 種族固有性ヲ有セズシテ當該菌ノミナラズ、凡 セ シテ任意 ラレ タ N ニ持チ來セル黄色葡萄狀球菌 事實ナリ。余等ノ膿ノ實驗ニ於ケル 存在 スル喰菌作用阻 ノ喰菌作 止 一物質 所見 テ 用 1 喰 ヲ阻 Æ 亦種 亦 菌 止 作

族固

[有性ヲ有

セザル

ナ

り。

症、物 者 ١ 者アラン ŧ ヲ綜合考察 ノ二倍 或 量 ハ以上ノ余等ノ考察ニ承服 7 使用 モ 近 カラント 各濾液及ビ菌液注入後ノ血液單位容積內廣義喰細胞數「總喰」ノ増加率及ビ セ スル時ハ、原濾液○・五竓ト三十分煮濾液一・○竓 jν 、際ノ喰菌作用ヲ見ルニ、喰菌子數モ喰菌率モ三十分養濾液ハ遙カニ原濾液ヲ凌駕シ、前者ノ セリ。是即手抗原液毒力ノ相違ニ セ ズシテ膿中阻 JŁ 物質ノ存在 一歸スベ ゴヲ否認 + トハ 。即チ病原菌が「イムペデン」ヲ産生スルコト大ナ・モノニ非ズシテ實ニ原濾液中ニ含有セラル、一種 稍々 シソ ۱ر 毒 原·養兩濾 力相似ニ 近キ量ナ 液 ノ毒 滤液 力 jν 1 1 べ 3 相 シ = 違 0 力 3 = N 歸 • 毒力試 スベ w 毒 喰崩率 力 シ 験ノ結果 ŀ 略 考 K 程、阻 炎、止 六後 フル 相 等

|ハ終憩シ難ク局所乃至全身ノ症狀益々增惡スルニ至ルモノナリ。||質卽チ「イムペヂン」ノ作用ニヨルモノナルヲ認識スベキナリ。

ť 結

論

液 液ヲ三分シーハ ガ黄色衛 種ノ グラ 蜀狀球 ム陽性雙球菌 ソノ儘、 園 1 Ú 他 液 內自 ヲ立證シ ハ更ニ攝氏百度ニ洲騰シ 1然喰菌 Ø 作 iv 膿胸 用 上 患 = 如何 者 1 膿 = ツ 影響ス • 3 7 y ル重湯煎中ニテ三十分間及ビ百二十分間加熱シ、此ノ三ッノ 五分間養沸ニョリテ凝固スベ iv 力 ヲ檢 **シ** タルニ、三十分間加熱濾液存在ノ下ニテハ キ蛋白ヲ取リ去リ、ソノ ・残リノ 最大

喰菌作用ヲ惹起 y

血中 白血球過多ノ關係ヨリ觀察スル 白 Í 球 1 遊出 ラ促進 ス jν 時い原濾液 ノ作用ハ原濾液ニテ ○・五竓ノ毒力ト三十分養濾液 ۱د 最大ナリキ。

・○竓

ŀ

1

毒力

ŀ

ハ

兩

Þ

1

۴

同

ナ

N

四、故ニ結局原濾液ヨリモ養濾液ノ方ガ一面白血球ノ遊出ヲ促進スルコト微弱ニテアリナガラ、他面却テ强大ナル喰燼作 用ヲ惹起セシメタリ。而シテ養濾液ノ中ニテモ三十分養濾液ハ百二十分養濾液ヨリモ大ナル喰燼作用ヲ示シタリ。卽チ

三十分養濾液ノ効果ハ最大ナリキ。

六、此ノ「イムペヂン」ハ「イムペゲン」ノ一般的性質ノートシテ菌種族固有性ヲ示サズ、膿中ニハー種ノグラム陽性雙球菌 五、以上ハ膿胸患者ノ膿ノ中ニモ亦「イムペヂン」ガ含有セラレ居ルモノナルコトヲ立證シ得タルモノナリ。

1、化膿竈特ニ大量ノ有菌性膿ヲ有スル患者ガ凡テノ病原菌ノ侵入ニ對シテ抵抗力ノ威弱ヲ來スコトハ、此ノ「イムペデヲ示シナガラ黃色葡萄狀球菌ノ血中ニ於ケル自然喰燼作用ヲモ阻害セリ。

ン」現象ダケニテモ亦十分ニ理解シ得べキナリ。

キモノナリ。此ハ「イムペヂン」現象ヲ知ラザル者ハ未ダ以テ「炎症」ノ病理ヲ知リ拔キタル者トハ謂フ可カラザルナリ。凡、「イムペヂン」現象ヲ認識スルコトニヨリテ始メテ能ク「炎症」ノ病理ヲ認識シ且ッ其ノ治療ノ方針ヲ適切ニ定メ得可

Nachweis des Impedins im Eiter der an Pyothorax leidenden Patienten. Mitteilung: Das Impedin in einem durch gewisse Diplokokken

verursachten Eiter.

Dr. K. Hirose.

(Aus dem Laboratorium d. Kats. chirurg. Universitätsklinik zu Kyoto. (Prof. Dr. R. Torikala)

hinten von der 3. Rippe an unterhalb total gedämpft. Durch Probepunktion dünne gelblichgraue eitrige Flüssigkeit Ein 4-jähriges Mädchen leidet an Dyspnoe mit hohem Fieber und heftigen Husten. Die linke Brust vorn und

二八九

(第武號

一九

第六卷

「原

廣 湘 mit fibrinösen Fetzen konstatiert.

Im Eiter Gram-positive Diplokokken nachgewiesen. Der Eiter wurde am 11. Tage nach Krankheitsbeginn diesem entleert und scharf zentrifugiert, um das so gewonnene Eiterserum auf den Gehalt des Impedins zu untersuchen. Zu Zwecke wurde das Eiterserum zunächst in einem bei 100°C siedenden Wasserbade 5 Minuten lang erhitzt, wobei durch hohe Temperatur gerinnbare Eiweisskörper niederschlagen. Das auf diese Weise gekochte Eiterserum wird scharf zentrifugiert, um das Zentrifugat, in dem das Impedin nachgewiesen werden soll, zur Untersuchung heranzuziehen.

Das Zentrifugat wird mit soviel physiologischer Kochsalzlösung, die 5 proz. Karbolsäure enthält, versetzt, bis der Gehalt der Karbolsäire der zu untersuchenden Flüssigkeit 0,5 Prozent erreicht hat.

Das so verdünnte 5 Minuten lang bei 100°C gekochte Eiterserum wird dann durch eine Kerze getrieben, wodurch eine goldfarbige klare Flüssigkeit (Filtrat) hergestellt wird. Das Filtrat wurde des weiteren teils 30 Minuten bzw. 120 Minuten in einem bei 100°C siedenden Wasserbade erhitzt. Somit stellten wir 3 Testmaterialien vom Eiterserum her:

1) Orig, 2) F. K. 30′ und 3) F. K. 120′, wobei die beiden letzteren gegenüner dem Originalen ganz wenig getrübt aussahen.

Zur Prüfung der Phagozytose zogen wir eine Aufschwemmung (0,0028 ccm Erreger auf 1,0 ccm Medium) von bei 60°C abgetötetem und 2 Mal mit 0,85 proz. NaCl-Lösung gewaschenem Staphylococcus pyogenes aureus heran. Die Methode zur Prüfung der Phagozytose weicht in nichts von der ersten Angabe von H. Suguro ab. Die Ergebnisse der Versuche sind in folgender Tabelle zusammengestellt:

Die Art und I			Ergebnisse	
Phagozytose be Antigens (i. e. d		Phagozytat	Zahl der Phagozyten	Phagozytosen- koeffizient
Orig.	je	212,1	51300	4,13
F. K. 30'	•	335,5	43840	7,66
F. K. 120'	0,5 ccm	242,8	48480	5,00

Orig.		201,6	48160	4,40
F. K. 30'	je	323,5	399 80	8,09
F. K. 120'	I,o ccm	226,0	45260	4,99

Zusammenfassung.

- t) Wir konnten im Serum des von einem 4-jährigen an akuten Pyothorax leidenden Mädchen stammenden Eiters, der gewisse *Gram*-positive Diplokokken enthielt, die die Phagozytose der Staphylokokken im zirkulierenden Blute hemmende Eigenschaft nachweisen.
- 2) Die die Phagozytose behindernde Eigenschaft des Eiterserums honnte durch 5 Minuten lange Erhitzung bei 100°C nicht inaktiviert werden.
- 3) Durch die weitere 30 Minuten währende Abkochung des Eiterserums in einem bei 100°C siedenden Wasserbade konnte erst die die Phagozytosen hemmende Eigenschaft merklich aufgehoben werden, indem der Phagozytosen-Koeffizient beim Originalen, also 5 Minuten lang bei 100°C erhitztem Eiterserum 4.13 bzw. 4.40 and der beim F. K. 30′, also beim des weiteren 30 Minuten lang bei 100°C erhitzten, 7.66 bzw. 8.09 betrug.
- 4) Eiterserum, welches noch weiter 120 Minuten lang bei 100°C erhitzt worden war, ergab gegenüber dem Originalen (d. h. 5 Minuten erhitzten) einen grösseren Phagozytosen-Koeffizienten. (siehe die Tabelle!)
- 5) Somit wurde zum ersten Mal bewiesen, dass die Impedinerscheinung der Phagozytose nicht nur bei Reinkulturen, sondern auch bei den von Patienten stammenden Eitern nachweisbar ist.
- 6) Ist das Impedin in den durch Mikrobeninfektion entstandenen Eitern enthalten, so folgt daraus, dass dadurch die normalen Widerstände der Patienten gegen alle pathogenen Mikroben stark herabgesetzt werden und deshalb der Eiter möglichst frühzeitig entleert werden muss(Autoreferat).